

『3.11』から人間を考える Considering Humans Through 3.11

小山 芳郎

OYAMA, Yoshiro

はじめに

改めて、「3.11」とは何だったのか。その大惨事の意味を初めに考えたい。

2011年3月11日、マグニチュード9の大地震、最大でおよそ40メートルにも達した大津波、レベル7という最悪の原発事故の、天災と人災の複合災害が東日本を襲った。これは、人類が初めて体験した複合的な大惨事であり、2011年の世界のトップニュースになった所以である。何故、私が敢えて「3.11」の意味を強調するのかというと、(1)この重大な事実がやがて風化し忘れ去られてしまうことを心配する。(2)この複雑な現代社会では、予測のつかないいろんなことが起こりえ、人間は新しいことに気を奪われ、過去のことを忘れてしまう性質を持っている。(3)「3.11」のような大惨事は、今後、原発を持つどの国でも起こりうることであり、一歩間違えば、地球上の人類の終焉ともなりうることを危惧する。(4)「文明災」、「構造災」ともいわれ、単なる大災害では片付けられない大きな意味を持つものである。(5)日本人に、地球・自然・災害と人間との関係、エネルギー政策やライフスタイルのあり方など、人間のありようそのものを問いかけている、からである。

「3.11」と日本人をみつめながら人間を考えていきたい。

「3.11」と日本人

「3.11」の惨状のなかで、世界の人々が驚嘆したのが、被災地東北の人々の震災直後の行動と言動だった。2011年3月26日付けのニューヨーク・タイムズ紙は、「日本での混乱の中での、秩序と礼節、悲劇に直面しての冷静さと自己犠牲、静かな勇敢さ。これらはまるで日本人の国民性に織り込まれている特性のようだ」と伝えている。ニューオーリンズのハリケーンのときの略奪や暴動も便乗値上げなどもなかった。CNNの記者は、「略奪、暴動、公然と悲しみと怒りを表すのを見たほかの災害と違って、静かに悲しみ、人々は2~3本のボトルの水をもらうために秩序正しく、何時間も忍耐強く立っている」(『世界が感嘆する日本人』別冊宝島編集部編、宝島社、2011)と伝え、アラスカ大学の学生新聞 The Northern Light では、「Japan responds to tsunami disaster with dignity (津波災害に尊厳をもって対応する日本)」と題して、「この行動は世界中のほかの国々にとってモデルであり、我々は社会として、将来災害に見舞われたときに、それがテロリストによる攻撃であろうと天災であろうと、自ら進んで日本人と同じように礼儀正しいさまで行動することを望むべきである」(同上)と記している。

「仕方がない」

私は、テレビでの被災者へのインタビューで心に残っていた言葉がある。それは、地震、津波に襲わ

れ、家と親族を失ったある主婦の言葉である。それは「仕方がない」という言葉だった。

よく聞いていれば分かるが、これは、決してギブアップのあきらめの意味ではない。突然襲った悲劇にパニックになることもなく現状を冷静にとらえ、そのうえで前へ進もうという意思の表明である。私は、この言葉は「あきらめない」という意思表示に繋がる言葉であると思っている。「3.11」から4ヶ月後の7月、女子サッカーワールドカップの決勝戦でなでしこジャパンはアメリカとの試合で一進一退の攻防戦の末、PK戦で3対1で優勝。「あきらめない」は、このなでしこジャパンのキャッチフレーズのようにいわれたが、被災者の「仕方がない」→「あきらめない」も日本人特有の精神性ではないかと考えている。

それでも当初、私は、「仕方がない」という言葉は地震・津波の天災被災者の言葉としては理解できるが、人災の原発被災者はとてもいえない言葉と思っていたが、福島原発被災者もこういったという。「起きてしまったことは仕方がない。でも、この後どうしたらいいのか、それを考えなければいけない」と。

その同じ「シカタガナイ」という言葉を、NHKのドキュメンタリー「渡辺謙 アメリカに行くー“9.11 テロ”に立ち向かった日系人」のなかで聞いた。「9.11」当時、ブッシュ政権下で運輸長官を務めていた日系2世のノーマン・ミネタ氏の言葉である。ミネタ氏は、東洋人として初めてアメリカ政府の閣僚になった人物で“9.11 テロ”の後、飛行機の乗客のうちアラブ系、イスラム系の人たちだけ入念に調べる「人種プロファイリング」をマスコミ、政治家と世論も一緒になって支持するなかで、彼は運輸長官の立場から、この差別と偏見に敢然と反対

した人物である。それは、彼自身が第二次大戦中、ワイオミング州のハートマウンテン日系人強制収容所で過酷な生活をした体験をもっていたからである。

「日系人が財産を没収された上、厳しい強制収容所生活を強いられたなかで耐えることができたその独特の精神力は、どこから来ているのでしょうか」との渡辺の問いにミネタ氏は、それは日系人の日本的な考え方「シカタガナイ」から来ているというのである。「どうしようもない現状」の中で「シカタガナイ」と考え、その上で「最善を尽くす」という考え方だといった。

すなわち、日本人は、目の前に起きた災難を冷静に受け入れ、前向きに対処する強い精神力を文化として日本人のDNAのなかに身につけてきたのである。これは、大乘仏教の「忍辱（にんにく）」、精神的な屈辱や苦難に耐え、自分の道を貫くという考えからきているともいわれている。

フランスのル・モンド紙も「Shikata ga nai」と表現したように、「ツナミ」と同様に外国語になったといっても過言ではなさそうだ。さらに、今回の震災で、米英のマスコミが使った言葉には、「ガマン」という言葉も多かったという。

「シカタガナイ」→「ガマン」→「あきらめない」は、日本人の精神性としてひと繋がりになっているのではないだろうか。

日本人の「無常観」

こうした言葉を口にする日本人の心の底流にあるのは、「諸行無常」という「無常観」ではないだろうか。「地上に永遠なるものは一つもない」「形あるものは必ず壊れる」「人は生きて、やがて死ぬ」という仏教の教えであり、日本の文化でもある。この「無常観」は、「平家物語」の冒頭「祇園精舎の鐘

の声」に代表されるが、この東洋的な思想が、外国人のなかにも世代を超えて共感をもつ人が増えている。1969年、ノーベル医学生理学賞を受賞したドイツ生まれのアメリカ人分子生物学者のデルブリュック博士が、受賞祝いのお返しに送ったのは「祇園精舎」の英訳文だった。この年の医学生理学賞はデルブリュック博士を含めた3人が受賞したのだが、当初、3人の同時受賞に違和感を感じ学問の世界での競争のはかなさを感じ「祇園精舎の鐘の声」に共鳴したという。さらに2012年1月12日、国際文化会館にて開催された国際交流基金主催の日本研究の外国人学生によるシンポジウム「3.11：その時どこで何を考えたか」に参加したときのことである。ワルシャワ工科大学のポーランド人学生は、『諸行無常』を世界の格言にしてはどうか」と発言し、北京外国語大学の中国人学生も「世の中は無常である。人間は誰でも運と不運がある。しかし、常に運を分かち合い、不運を助け合うのが生きていく上では必要である。国と国も同じはずである」と語った。世界が驚いた日本人の精神性の土台にあるものが国籍、老若を問わず、世界の人々に理解されてきていることを痛感する。

科学者と専門家の反省

さて、今回の大震災と原発事故は、科学者と専門家に大きな敗北感をもたらした。近年の専門家集団中心の社会システムが、いわゆる「ムラ」を生み、素人の一般社会との断絶を生んできた。「3.11」をきっかけに、改めて現代の社会システムのあり方を問わなければならない。科学者は自然科学、人文科学、社会科学のそれぞれの専門分野で、また、そのなかでもさらに細分化されたなかで、専門家は、立法、司法、行政の政治家や官僚、また、経済界、マ

スコミも含めたあらゆる産業分野のそれぞれのなかで安住し、宇宙・地球・人間といった大局的な観点からのものの見方を麻痺させてきたのではないかと思う。

その結果が、今回の政治家や官僚の対応の遅れや専門家の「想定外」発言などを生み出したのではないかと思う。科学者、専門家は、それぞれの専門分野で自分たちにしか分からない専門用語を駆使し、一般社会の素人にも理解してもらうような努力をしてこなかったのではないか。また、情報過多の現代の社会システムの中で一般の人々も、いわば「なんとなく分かったつもり」の「暗黙知」（野中郁次郎一橋大学名誉教授（経営学）の定義による）の世界で安住し、知識が完全に自分のものとなり意見もいえる、いわゆる「形式知」（同上）への昇華とそれに基づく「知恵」を生み出す努力を怠ってきたのではないだろうか。また、専門分化と複雑化するなかで、専門的な事象を国民に分かりやすく伝えるマスコミの役割も改めて問われなければならない。こうしたことが、人間がいろんな局面で判断、対処するために最も大事な「知恵」と「想像力」の欠如をもたらしてきたのではないかと思うのである。

SF映画が問いかけているもの

今回の大津波の映像をテレビで見た殆どの人々が、現実とは違うSF映画の世界ではと目を疑ったのではないだろうか。フィクションとノンフィクションの境目は何か。私は、長年、NHKでテレビディレクター、プロデューサーとしてニュースやドキュメンタリーの映像の世界で仕事をしてきたこともあり、「3.11」後、無性に過去のSF映画を検証したいという衝動にかられ国内外のものを数多く、視聴してみた。そして、思ったことは、科学者の監修を得た

ものや過去の災害・事故などを参考にしたものなのかには科学者、専門家にも一般の人々にも教訓に満ちたものが少なくないということである。それは「形式知」に裏付けられた事実、「知恵」と「想像力」を膨らませた「警告」になっているからである。「3.11」の地震・津波・原発事故は、現代人の「暗黙知」とらわれた「安全・安心神話」に反省を促すものであった。教訓に満ちた SF 映画をここでは3本だけ紹介したい。

1973年 日本映画「日本沈没」(原作 小松左京)

日本海溝の異変にはじまり東京大地震、富士山の大噴火などにより日本列島が引き裂かれ、やがて沈没するというベストセラー小説を映画化したもの。2〜3年後に、日本列島が沈没するなどということは100万年はありえないと、この映画の監修者で地球物理学者の竹内均氏が語っているが、竹内氏の他にも、大崎順彦(耐震工学)、奈須紀幸(海洋学)、諏訪彰(火山学)の各氏と各分野の科学者が監修を務めている。この小説「日本沈没」を発表したとき、専門家からは「高速道路が倒れるなんてことはありえない」といった指摘を受けたというが、1995年の阪神・淡路大震災のときに阪神高速の一部が横倒しになり、小松氏自身も、自らの「想像力」が「現実化」したことに衝撃を受けたという。阪神・淡路大震災のことに触れたので紹介するが、実は、この大震災が起きる前まで一般の方々は勿論、学者やマスコミの間でも、科学的根拠もないまま何となく「関西には地震の危険がない」という風説があったことを苦い思い出としてもっている。警鐘を鳴らす学者も一部にはいたのだが……。

2005年 ドイツ映画「TSUNAMI」

北海の石油掘削基地の海底で、無謀な資源開発を進める巨大企業。海底爆破は大規模な地盤沈下を誘発し、高さ40メートルの大津波が陸地をめぐってくるといふもの。その危険に気づいて政府も動き始めるが、そのとき、油田基地はすでに武装テロ集団に占拠されていた。この映画を見て気になったのは、現在、世界で石炭、石油、天然ガスなどのエネルギー資源をめぐる国際紛争の火種になるようなことが起きているが、各国が国益を前面に出して競って資源開発競争を進めていって危険はないのかということである。人間が人工的に起こす地震を「人造地震」というが、これまでに70件以上の人造地震の発生が報告されている(『図解・地震のメカニズム』都司嘉宣監修、永岡書店、2010)。ダム造成や鉱山開発、地熱発電利用、石油掘削、原油や天然ガス採取、地下核爆発実験などである。1962年のアメリカ・コロラド州デンバーで深さ3.7kmの井戸に米軍の軍需工場から出た放射性廃棄物(液体)を捨てたところ地震が発生し、その危険性から1965年9月、放射性廃棄物の処理計画をストップしたことがあった(同上)。2012年4月には、米地質調査所(USGS)の研究チームが、もともと地震があまり起きたことのないコロラド州とオクラホマ州を含めた米中部でのマグニチュード3以上の地震が急増しているのは、日本でも輸入に向けた動きのあるシェールガスや石油の採掘が原因ではないかと発表した。

1979年 アメリカ映画「チャイナ・シンドローム」

現在、反原発運動家としても知られている女優ジェーン・フォンダの主演で代表作である。TVキャスターとカメラマンが原子力発電所を取材中に“事

故”を目撃したことから物語は始まり、原発事故をもみ消そうとする人々や安全性よりも経済効率を優先する企業の姿勢を厳しく批判した映画で、全米公開12日後にスリーマイル島のメルトダウン事故が起きたという、不気味な先見性に満ちた作品である。

「3.11」を体験した日本人は、改めて感受性を研ぎ澄ましてSF映画からフィクションとノンフィクションの間を真摯に見つめるべきである。こうした意味からも多くの人々が「想像力」を形にする「文学的センス」や「芸術的センス」を磨き、「知性」や「理性」だけに偏ることなく、「感性」を研ぎ澄ますことが、今、特に求められているのではないだろうか。近代化が進むなかで感性の大切さを文学作品の中に示してきた宮沢賢治も著書『農民芸術概論綱要』のなかで「誰人もみな芸術家たる感受をなせ」と訴えている。

「文明災」と「構造災」

『3.11』の原発事故は近代文明の悪をあぶりだした。これは天災であり、人災であり、『文明災』でもある。改めて近代文明の是非を問い直し、復興を通じて新しい文明を築き世界の模範に」（『東洋経済』2011年4月5日）と、「文明災」と呼んだのは、仙台生まれの哲学者梅原猛氏である。

私も「3.11」の発生を知ったとき、これは、ベーコンやデカルトに始る西洋近代思想などの西洋文明が牽引してきた、自然を支配し搾取するという文明の災禍ではと直感した。

また、「構造災」と呼んだのは、東京大学大学院人文社会系研究科教授（科学社会学）の松本三和夫氏である。氏は「構造災」とは「科学と技術と社会の間の界面（インターフェイス）で起こる災害」

（『サステナ』第23号、2012）と定義する。「今回の事故は科学の失敗だけで起こったとは考えにくい。核分裂反応の原理は完全に分かっていたけれど、炉の設計に失敗したのであれば、技術の失敗。けれども、今回は技術の失敗だけではない。それを使った社会の失敗かという、そう単純な使用者責任の問題でもない。科学と技術と社会をつなぐ複数のチャンネルの制度設計のあり方や機能不全に由来する失敗だ」（同上）という。さらに「こうした災害を防ぐには、インターフェイスの仕組みの部分に実態として何が埋め込まれているかきちんと見直すことが必要。現場で運用されている倫理は、何らかの暗黙のルールや習慣によって変形されて運用されている可能性が少なくない……米スペースシャトル「チャレンジャー号」爆発事故や旧ソ連のチェルノブイリ原発事故後の放射性セシウムの拡散予測などに関する災害社会学のこれまでの知見によると、いわゆる日常業務のしがらみがいっぱい埋まっている状態の複雑性を、現場の暗黙のルールや習慣によって縮減しながら巨大科学技術と社会の界面で人が行動している可能性がある。そういう状況のもとでは、人が入れ替わっても依然として残るような構造的な制度の欠陥があっても見過ごされやすく、その種の暗黙のルールや習慣を尊重した対症療法を重ねることで間に合わされてしまう可能性がある」（同上）と警告を発している。確かに「3.11」は、普段、それぞれの専門分野の組織の中での「暗黙のルールや習慣」と「日常のしがらみ」の葛藤のなかでものごとを判断、行動してきた怖さをも感じさせてくれたように思う。

2011年という年

2011年1月、NHK ラジオで、2006年のベストセ

ラー「国家の品格」の著者で常に日本人に警鐘を鳴らしてきた数学者の藤原正彦氏に「2011年の日本」と題してインタビューをしたとき、私は、「2011年は、ある種、人間にとっての節目の年。世界的に人間のあるべき姿が問われる年になるのではないか」と言った。

その根拠は、2011年は、ノルウェーの冒険家アムセンが、地球の果てを求め探検し人類初の南極点到達からちょうど100年。旧ソ連の宇宙飛行士ガガーリンが人類初の有人宇宙飛行に成功してから、ちょうど50年。以後、米ソが冷戦構造のなかで宇宙開発、原子力開発などにしのぎを削ることになるが、両国ともに科学技術の行方に暗雲をもたらす二大事故を引き起こすことになる。「構造災」のところで触れた、米スペースシャトル「チャレンジャー号」爆発事故と旧ソ連のチェルノブリ原発事故である。この二大事故から25年という年だったのである。

そしてこの年の「3.11」である。人類史上初のトリプルショックは、人間が地球という大自然の前にいかに小さな存在か、地球の掟を無視し、思い上がり、科学技術を過信し安全神話を勝手に作り上げてきた人間の愚かさを象徴的に示したものといえるのではないだろうか。

18世紀の後半、イギリスで「産業革命」が始まり、ワットが発明した蒸気機関車を石炭や石油を燃やして動力として使い始め、やがて20世紀には、電気がエネルギーの主流となって現在に至っている。その電気エネルギーの資源も全て有限のものである。化石燃料の石油、石炭、天然ガスは何億年もの時間をかけて地球が作り出したもの。原子力発電に使われるウランは、地球誕生のころに宇宙から降ってきた隕石に含まれていたものである。

今のペースで使っていけば、石油は41～45年、石炭は230～300年、天然ガスは60～62年、ウランは64～100年で地球上からなくなるといわれている。日本では、これらの資源が殆どなく、外国からの輸入に頼っている。

日本で一般に電気が使われだしたのは、わずか120年前のことだ。そして、人類はここ100年という短い期間に科学技術を駆使して宇宙と地球と深海をフロンティアと称して探索、開発してきたのだ。

改めて問う。地震大国の日本列島に54基もの原子力発電所をもつ世界第3の原発推進国の道はこのままでいいのか。今回の原発事故について推進派、反対派の双方の原子力研究者から「もっと安全面などについて強く主張をすればよかった。力不足を感じた」という真摯な反省の弁も見聞きした。日本は、少子化に向かって電力需要も減少していくことが予測されるにもかかわらず、「オール電化」とか「不夜城」などという企業の経営論理や現代人の自然に反する欲望が優先されすぎてきたのではないだろうか。地球温暖化や酸性雨などのことも考えながら、太陽光、風力、地熱や海洋などの自然エネルギーやバイオマスエネルギーや燃料電池などの新エネルギーを既存のエネルギーと組み合わせてどう効果的に使っていくべきか。

もしも、日本がパワーポリティックスの安全保障の面からいざというときの核開発の潜在能力を示すために、また、日本の原子力研究者の技術力を後発の原発所有国などの火急のときのためなどに維持する必要であるというのなら、可能な限り安心・安全な原子力発電所を1～2基に限定することも考えなければならぬだろう。

大事なことは、有限な地球上で人間として心豊かな幸福な生き方をどのように構築するかを、

「3.11」を体験した日本人全員が、今こそオール・ジャパンで考えるべきだということである。

さらに危惧すべきことは、2011年10月に、人類の危機ともいわれてきた「地球人口70億人」を突破してしまったことである。アメリカの環境学者で、毎年、「地球白書」を出版してきたワールド・ウォッチ研究所の創設者レスター・ブラウン氏は、地球が養える人口は食糧、水、エネルギーなどから70億人が限界と警鐘を鳴らし続けてきた。

ここで、先ほども触れたNHKラジオ番組の藤原正彦氏のご意見で特に共感を覚えた言葉を紹介したい。

「現代の最大の危機は、政治家も官僚も国民も全て改革の能力を失ってしまったことである。皆、危機感を感じ頑張っている。しかし、大局的な長期的な視野で羅針盤を指し示す人がいないということだ。そうした人物がいなくなった理由は、日本人の教養が低下してしまったことにある。読書や活字文化の衰退である。教養がないと大局観は生まれない。芸術、文化、思想、音楽、歴史など何の役にも立たないような教養がないと大局観は生まれない。テレビやインターネットやケータイをいくらやっても駄目だ。……今は、命懸けで考える人がいない。皆で会議をやっているだけだ。」

「3.11」が起きる2ヶ月前の言葉である。

「3.11」を日本の休日“ノー電気デー”に

今こそ、「3.11」の天災・人災と「人口70億突破」の意味を真剣に考え、日本から世界に向け人類存続のため、持続可能な地球のために提言をしていかなければならない。

言葉だけではなく、痛みを伴う実践をすることである。そこで、3月11日を日本の“ノー電気デー”の休日として、政治、経済、学術、マスコミな

ど、あらゆる職種の大人から子どもまで全ての日本人が家庭で「人間・地球・自然・文明」を考え、話し合う日とすることを提唱したい。年に一度、生命に関わる医療機関など一部の例外を除いて全ての電気をストップ。テレビもパソコンもケータイもやめ、近代文明を代表する“電気”が日本に登場する以前の、百数十年前の江戸時代の暮らしに思いをはせながら、20世紀の科学技術の進歩とともに享受してきた成長と繁栄、生活の便利さ、快適さのプラス面と、それと引き換えに失った多くのマイナス面を語り合い、「真に幸せな生活とは何か」やエネルギー、環境問題などの意見集約の国民運動にしたい。やがて、民主的な国民投票的なものに発展していけば、政治家や官僚、学者、マスコミなどの専門家に任せきりにしない、一人一人の日本国民の世論を代表するものとなろう。人類存続のためには、“連帯”、“共生”を旨としながら、自己犠牲も伴う“自制”の精神を世界各国が共有、実践しなければ人類に未来はないと思うからである。“和”の精神と“儉約”、“我慢”、“質素”を美徳としてきた日本。“自制”を形で考える「ノー電気デー」の日本モデルを世界に示そう。日本発「ノー電気デー」の日は、またの名を「江戸の日」としよう。日本のため、世界のため、地球のため、未来世代のために、「3.11」のとき世界が驚嘆した日本人の精神性と「世のため人のためなら」という統一的な「ガンマン」の精神を今一度世界に示そう。“自制”こそが、人類存続のキーワードである。

「ぼくらは欲望のままに物質の豊かさを求めて、わき目もふらず突っ走ってきましたが、いまがここらで立ち止まって周りを見渡す最後のチャンスではないかと思います。」（これは1989年に他界した医学博士で漫画家の手塚治虫氏の生前の言葉であ

る。)

東西文明のいいとこどりの日本が世界を救う

日本は、明治維新以来、西洋文明を追い求め、西洋の科学技術を取り入れ、アジアで唯一、近代化に成功し、以来、ひたすら成長と繁栄、大量生産、大量消費、大量廃棄の道を突き進んできた。当初は、「和魂洋才」を旨としていたがいつしか「無魂洋才」になってしまったと揶揄される昨今である。しかし、日本には東西の文明に学び、独自の文明を築いてきた誇るべき歴史がある。明治維新のとき、岩倉使節団を2年近く、欧米に派遣して西洋文明を学んだ日本は、それ以前に2000年に及ぶ中国との交流から東洋思想を含めた東洋文明を学んでいるのである。東洋文明と西洋文明双方の光と影を最もよく知り、世界に例のない文明を築いてきた日本という国をもう一度、日本人自らが原点から見つめなおすこと——そこから全ては始まると考える。そのヒントとなるのは、江戸時代の日本と日本人の暮らしである。江戸の人々は、「人は皆、仏の化身」としてお互いに尊重すべきという人間観と、「草主人従」という言葉に象徴される、「草（自然）が主人、人はそれに従うもの」というエコロジー思想が根底にあり、共生社会を理想としていた。江戸時代の暮らしは、現代の100分の1しかエネルギーを消費していなかったといわれる。生活の基本は、宇宙の太陽、地球上の自然とともに生活をしてきたということである。そして、この頃、全国に5万の寺子屋が作られ、私塾や藩校、幕府が作った旗本、御家人のための学校・昌平坂学問所などがあり、当時の日本の教育水準は極めて高かった。幕末から明治の初めにかけて日本を訪れた外国人が、日本という国と日本人に新鮮な驚きを感じているのだ。

「皆、笑顔をもち、誠実で礼儀正しく親切」「町は塵ひとつなく、清潔」「一見、貧しそうに見えるが、皆、幸せそうだ」（『逝きし世の面影』渡辺京二、平凡社ライブラリー、2005）。今こそ「温故知新」。江戸システムに学ぶときである。

勿論、当時と今では、社会構造も人口も違い、職種も生活スタイルも違うのは重々承知の上で敢えて申し上げたいのである。

人類存続のために

私が親交をもってきた、日本のDNA研究の草分けで、7年前（2007年）に90歳でこの世を去った分子生物学者渡邊格氏が37年前（1976年）に出版した「人間の終焉」という本がある。氏は、この本の中でこのまま欲望のまま、繁栄と成長の道を突き進んでいけば、2050年の人類100億人（現在は、91億人に下方修正）時代を前にして強者のみが生き残る「弱肉強食の恥ずべき生存」か、あるいは今のままの生き方を変えずに突き進み、弱者も強者も手を携えて終焉を迎える「尊厳なる終焉」かの二者択一ではないかと警鐘を鳴らしていた。しかし、その後、氏は、第三の道を提起している。それは、人類100億時代にも人類がサバイブできる生き方として、いわゆる「ぶらぶら人間」の登場に期待をかけている。人間集団を三つのグループに分ける。第一のグループは、世界の衣食住をまかなう産業界やそれを管理する政治家など、人口を支えるための生産活動をする働き手としての少数の人間集団。第二のグループは、心身障害者や老人のようなマイナス要素を背負った、生産活動の出来ない多数の人間集団。第三のグループが、生産活動や産業活動をする能力はあっても人類存続のため、地球環境維持のため、余計なエネルギーを消費せず趣味や芸術、学問などの生活

をする、氏がいう、いわゆる「ぶらぶら人間」の集団。この第三のグループの人間が大多数であるほどよい、と訴える。江戸時代の日本には、そうした「ぶらぶら人間」のような職人の集団が彫り物とか塗り物など芸術的なものを生み出したり、戦後の日本の産業に寄与した高い技術をもった職工を生み出してきた。「ぶらぶら人間」が世界に冠たる新しい技術や芸術を生んできたのである。

おわりに

私の故郷は岩手県一関市。「3.11」は、陸前高田市在住の高校時代の同級生の生命を奪ってしまった。「3.11」の後、ハーバード大学のマイケル・サンデル教授は、「日本への世界の共感が、共同体意識が芽生えるキッカケとなり、『世界市民』の意識が強くなることを期待したい」（2011年4月22日、米ハーバード大学学生主催シンポジウム）と語っている。やがて、アメリカも中国も、そして全ての国が年に一度、“ノー電気デー”を実施するとき、地球市民として宇宙船地球号を皆で守ろうと心が一つになり地球は持続可能なものとなるだろう。そうなれば2万人に近い「3.11」の犠牲者も浮かべられることだろう。しかし、一部の権力を持った「利己主義者」と、大多数の「無関心主義者」に世界が占拠されたなら地球と人類に未来はない。

3月11日、暗闇のなかに今まで見えなかったものが見えてくるに違いない。

参考文献

阿部治ほか（2007）『あなたの暮らしが世界を変える』山と溪谷社
 石川英輔、田中優子（1999）『大江戸 生活体験事情』講談社

小松左京（2006）『天変地異の黙示録』日本文芸社
 越川禮子、林田明大（2006）『「江戸しぐさ」完全理解』三五館
 J. ダイヤモンド（2000）『銃・病原菌・鉄』（倉骨彰訳）草思社
 竹内均（1975）『地球との対話』東京図書
 田中優（2007）『地球温暖化／人類滅亡のシナリオは回避できるか』扶桑社
 都司嘉宣監修（2010）『図解・地震のメカニズム』永岡書店
 手塚治虫（1996）『ガラスの地球を救え』光文社
 利根川進他（2009）渡邊格追悼文集『われわれ人間は進化できない』DNA研究所
 新潟江戸しぐさ研究会（2007）『「江戸しぐさ」入門』三五館
 別冊宝島編集部編（2011）『世界が感嘆する日本人』宝島社
 M. サンデル（2011）『マイケル・サンデル大震災特別講義 私たちはどう生きるのか』NHK出版
 松本三和夫（2012）『構造災』岩波書店
 山折哲雄（2010）『わたしが死について語るなら』ポプラ社
 渡邊格（1976）『人間の終焉』朝日出版社
 渡辺京二（2005）『逝きし世の面影』平凡社
 レスター・ブラウン（2005）『フードセキュリティ——だれが世界を養うのか』（福岡克也監訳）ワールドウォッチジャパン

小山 芳郎（ジャーナリスト・元NHKプロデューサー）